ベンチャード・ケイヴ

マッスル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ベンチャード・ケイヴ

【Ｎコード】
Ｎ８４２４Ｋ

【作者名】
マッスル

【あらすじ】
あまりに無謀な洞窟探険者！彼は未踏の大洞窟に眠る秘宝を手にすることはできるのか！
むしろ、生き残れるのか？！

第一回　黄金の魔窟

男はヘルメットのヘッドランプを二度つけた。
「よしいいぞ、もっと降ろしてくれ」
遥か上方でゴンドラを操作する者に合図を送りつつ、男は未踏の大洞窟に挑むことの喜びに打ち震える。

赤い服に青いオーバーオール。これは洞窟で遭難した場合に発見され易いよう、目立つ配色を選んだつもりだ。
そうとも、これは探索をスムーズに進める為の知恵だ。この業界じゃあ俺が初で、誰も真似なんかしちゃいない。そう自負している。
洞窟探険家だとか、トレジャーハンターだとか、言い様は沢山ある。それでもこんな職業は、一般社会じゃあ英英辞書の埋め合わせ程度でしかないのさ。
構うものかい。
この洞窟の奥地に眠ると言われる黄金ピラミッドを発見できれば、俺には十分な富と名声が、辞書には「無謀な洞窟探検野郎」という項目が追加されるはずだ。それはハイスクールの学生達にとっては、少なくとも「スペルト小麦」よりも意味のある言葉さ。

男は次は三度、ヘッドランプをつけた。
「よし、ここでいい。横穴が見える」
上方の操作者は暗闇の明滅を見て取り、ゴンドラを停止させた。
「随分と深いじゃないの。それに隣のイタリア人が作ったピザ焼き窯よりもイカしてやがる」
男は手元のブラスターがしっかりと充電されているのを確認し、横穴への一歩を踏み出そうとする。あまりに偉大な冒険の訪れに、自然と足が震えてくる。
不随意な己が足を押さえつけ、無理矢理にでも一歩を踏み出して

やろう。ゴンドラから先にあるのは、四メートルほどに切り抜かれた無粋な円形劇場だけだ。

「やってやるかな」

途端。

男はゴンドラと横穴の隙間に足をすべらせた。

男は自身の背丈分ほど洞窟へと落下した所で、意識が途絶えることを意識した。

こうして男は死んだ。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

第二回　失われた階段

男が居る。
各所に巻かれた包帯に、右手右脚にギプスという姿は痛々しい。しかし何度かその場でジャンプを繰り返し、自身の足に不調が無いことを確かめる姿には、未だに枯れぬ意志を感じ取れる。

男はヘルメットのヘッドランプを二度つけた。
「よしいいぞ、もっと降ろしてくれ」
遥か上方でゴンドラを操作する者に合図を送りつつ、男は未踏の大洞窟に挑むことの喜びに打ち震える。

男は次は三度、ヘッドランプをつけた。
「よし、ここでいい。横穴が見える」
上方の操作者は暗闇の明滅を見て取り、ゴンドラを停止させた。
「随分と深いじゃないの。それに隣のイタリア人が作ったピザ焼き窯よりもイカしてやがる」
男は手元のブラスターがしっかりと充電されているのを確認し、横穴への一歩を踏み出そうとする。あまりに偉大な冒険の訪れに、自然と足が震えてくる。
不随意な己が足を押さえつけ、無理矢理にでも一歩を踏み出してやろう。ゴンドラから先にあるのは、四メートルほどに切り抜かれた無粋な円形劇場だけだ。
「やってやるかな」

跳躍。
ヘッドランプが揺れ、その視界が不安定になるも、男はしっかと洞窟の横穴へと辿り着いた。

「おうおう、よく見りゃゴンドラから地面まで随分と離れてやがる。ちゃんと跳ばなけりゃゴンドラから真っ逆さまだ。隣のイタリア人もピザをご自慢のフローリングにブチまけてやがったしな」
男は周囲を確認しつつ歩き始める。
洞窟特有の湿った空気などは煙草よりも心地良いし、不安定な岩肌の方が薄汚いスラムの裏路地よりよっぽど歩き易い。それより何より、この先には財宝がある。
なるほどそうだ、到達というのは俺らみたいな人間にはボーナスでしか無い訳で、その道中にあるスリルこそがサラリーだ。もっとも、この高給で変えるものなんて命程度なのが口惜しい所だが。
「落し物だぜ」
男は足先に触れた感触だけで、それが人造物であると心得た。
洞窟にある物など、かつて生きていた物か未だ死んでない物しか無いのだ。それ以外は押し並べて人間が持ち込んだ物に決まっている。加えて言えば、持ち込んだ人間の多くは前者二つのどちらかになっているのが常だ。
ヘッドランプで足元を照らせば、誰かが起き去ったであろう金袋がくたびれた様子で拾い上げられるのを待っていた。
「ヒュー。５００ドルも入ってやがる。これで家のローンでも返すことにするよ、建てたばっかりなんだ」

硬貨の重みを確かめつつ、男は再びヘッドランプを頼りに洞窟を進んでいく。
ふと静まり、微かに人工物、それも重機めいた低音が耳に届いた。
「ああ、わかった。ご先輩さん方が居た訳だ」
男のヘッドランプが未踏の洞窟には不似合いな、粗末なエレベーターの姿を照らし出した。忙しない人類社会の象徴は未だに電力が通っているらしく、無機質な昇降運動を繰り返している。
「こんなものまで作ってくれたなんて素晴らしいね。まぁどうせなら一緒にバーカウンターでも作ってくれれば良かったがね」

大海ではぐれた海洋哺乳類のように、エレベーターは寂しく重低音を反響させる。
「そう鳴くなよ、俺がちゃんと役目をやるぜ」
男は足元を良く調べ、簡単な跳躍でエレベーターへと飛び乗れることを目算した。
次いで、数珠繋ぎで観覧車みたく回っているリフトが、ちょうど良い高さの所に来るのを待つ。
「やってやるかな」

跳躍。
男の目算では、1秒もすれば自分の足が錆び付いたリフトに甲高い音を立てるはずだった。

2秒ほどの誤差は、リフトが予想外に降下していたことを表すし、その後に響いた鈍い音も着地の失敗を表すだけだった。

「ぐおおおお」

こうして男は死んだ。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

第三回　まだら縄の罠

男が居る。
どこをどうしたらこうなるのか、全身に包帯を巻き、両手両足をギプスで固定されている。だがしかし無意味に手元のブラスターを放ち、きちんと充電されていることを確かめる姿には、未だに枯れぬ意志を感じ取れる。

男はヘルメットのヘッドランプを三度つけた。
「よし、ここでいい。横穴が見える」
遥か上方でゴンドラを操作する者に合図を送りつつ、男は未踏の大洞窟に挑むことの喜びに打ち震える。

次いで跳躍。
ヘッドランプが揺れ、その視界が不安定になるも、男はしっかと洞窟の横穴へと辿り着いた。
「おうおう、よく見りゃゴンドラから地面まで随分と離れてやがる。ちゃんと跳ばなけりゃゴンドラから真っ逆さまだ」
男は周囲を確認しつつ歩き始める。

ふと静まり、微かに人工物、それも重機めいた低音が耳に届いた。
「ああ、わかった。ご先輩さん方が居た訳だ」
男のヘッドランプが未踏の洞窟には不似合いな、粗末なエレベーターの姿を照らし出した。忙しない人類社会の象徴は未だに電力が通っているらしく、無機質な昇降運動を繰り返している。
「良かったな、人に使われるのも久しぶりだろうよ」
男は足元を良く調べ、簡単な跳躍でエレベーターへと飛び乗れることを目算した。

次いで、数珠繋ぎで観覧車みたく回っているリフトが、ちょうど良い高さの所に来るのを待つ。
「やってやるかな」

再びの跳躍。
男の目算通り、1秒もしないうちに数段目のリフトは男の右脚の石膏と衝突し、その着地を丁寧に迎えた。
「まだ十分に動いてるみたいじゃないか。先輩方の苦労も報われた訳だ」
リフトが10メートル程降下した所で軽く跳び、反対側にある昇りのリフトに足を取られないよう男は着地する。
「さて、この先にゃ何があるっていうんだい」
相変わらず視界に広がるのは大多数たる暗闇で、光源の心もとなさがこの冒険の未来を暗示しているようだった。それはもちろん一筋の光明という意味でなく、冒険は常にカウントレスの失敗と一握りの幸運しかないという意味だが。
そうした中、前方で光に反射した何かが、男の目に突き刺さった。それはチラリと覗いた、一握りの幸運の、そのまた一粒だった。
「なるほど、こりゃ伝説のピラミッドが眠ってるてのは本当かもしれないな」
男は反射した物を拾い上げて呟く。
「金貨だ。それも偽物じゃなけりゃ古代文明の物、ああ、そうだ、このジャガーの模様はマヤ語の講義で見たことがあるぞ」
男はコインをポケットにしまい込む。

男は少し歩き、手にしたコインを指で軽く弾いた所で、前方の不気味な物に目を奪われた。やがて光によって不気味な物の正体に気づくと、安堵の息と共に小さく呟く。
「いいね。半信半疑だったが、先輩方のご執心ぶりを見る限り、ちょっとは信用の方が勝るね」

男の視線の先に、洞窟の上部から垂れ下がる登攀用ロープがあった。これもまた洞窟の先駆者達が残した実用的な遺産の一つだろう。
詳しく見れば、行き止まりに見える空間の上部に横穴が続いており、ロープはそこに至る為の足掛けとして用意されているようだった。
「どれ、子供心に帰ってみようかな」
男は跳躍してロープに掴まり、全身を使って登っていく。
「人には見られたくないね、カブトムシになった気分だ」
ヘッドランプの光が、ようやく上方に続いた横穴を照らし、しっかりとした足場が続いていることを捉えた。ゴンドラやエレベーターでの経験を生かし、今度は安定した高度からの跳躍を試みる。
「やってやるかな」

誤差はあった。
洞窟の湿気がロープに露を滴らせていたこともそうだし、がっちりと固められたギプスがそれを気づかせなかったのもそうだった。
男は自分が跳んだ所で、ロープが死にかけの蛇みたいに力なく自身を絡めていることに気づきそれと共に落下していった。

濡れたロープが男の頬をぴちんと打った。
男の体がなおも落下していく。

「ぐおおおおお」

こうして男は死んだ。

To be continued...

第四回　外伝？

大学の講堂に幾らかの学生が、恐らくはその心中も同様だろう、まばらに座っている。その目線は決して壇上で教鞭を取る者には向けられない。大部分の学生がそういう態度を取るのだから、ここではそれが正しい過ちなのだ。

ただ一人、最前列で興味深そうに講義を受ける金髪の女生徒だけが、過った正しさを保っている。

「そういう訳でアステカ文明では太陽に生贄が奉げられていた訳だが、これは決して残酷な行為ではなく、この上ない神聖な儀式であり、その対象も常に奴隷という訳でもなく……」

そこで壇上の男が見計らったように間を置くと、次いで終業を伝えるベルが鳴った。

「ああ、ベルが鳴ってしまったな。今日はここまでだ。後は適当に勉強しといてくれ」

男の言葉も待たず、学生達は次の授業の為に浅瀬の潮が引くように退室していく。

しかしやはり一人だけ、過った正しさが、砂浜に残った泡沫が壇上の男の方へと近づいていく。

「素晴らしい講義でした、先生」

その女性は金髪を揺らして、単位を欲しがる学生にはありがちの文句を吐く。

「ん？　ああ、君はいつも前の方で熱心に聴いてるな、ええと、名前が……」

「リーバーマンです、アリス・リーバーマン」

「そうか、それで優等生であるリーバーマン君は次の授業はいいの

かな」
　いくら熱心に聴いていようと、メソアメリカ文明論の講義など社会では役に立たない部類だ。
改めて自分で考えるのも癪だが、こんな講義を取る学生は余程の暇人か、単位が欲しいだけの賢しいヤツのどちらかだ。
　とはいえ、見る限りこのリーバーマンという女生徒はそうした者達とは違った知性の輝きを秘めているように見える。

「先生の講義以外は受けていませんの。興味がありません」
「光栄だね。じゃあ今すぐアドバイザーと一緒にカリキュラムを組み直すことを提案するよ」
　男は授業を早々と切り上げて一服するつもりだったが、結局廊下に出てもこの好奇心旺盛な女生徒がついてくるので、いくらか悪態をついてやることにした。
「先生のご専攻は何かしら」
「さぁ。考古学、地質学、体育学のどれかだと思うよ」
「聞いていたのとは違いますわ」
　男は軽く肩をすくめた。
「スペリオロジーだ。スペリングはわかる？」
「ええ、洞穴学ですわね。最初から言ってくださってもわかりました」
　つくづく知性、社会での足枷での意味でだが、それが溢れる女性だと男はそう思った。

「父は地質学の教授ですの」
「ああ、なるほど。それでそんなに詳しい訳だ」
　研究室に帰るまでの間、リーバーマンが勝手に身の上語りを始めて、いよいよ面倒なヤツに捕まったものだと男は深く後悔した。
「でも父は、二週間前に行方不明になりました」

突然にそれまでのトーンが変わったので、それに伴い男も怪訝な表情へと移る。
「君は何を言っているんだ？　そういうのは国家機関が受け持つものだ」
「捜索はされています。でもきっと、警察じゃ父を見つけられないわ」
男が疑問を差し挟むより先に、リーバーマンは鞄の中から古ぼけた地図を取り出してきた。
「父は、伝説のピラミッドが眠ると言われている大洞窟の調査に赴いて、そこで消息を絶ちました」
男は無意識のまま、リーバーマンが差し出した地図を手にしていた。
するとそこには、かつて自身も調査したことのある古代遺跡群が書き込まれており、その一点に件の大洞窟と思しきマークが記されていた。

「先生。先生ならきっと、興味がお有りになるはずですわ」
未だ見ぬ大洞窟の幻影を空想し、男は軽い立ち眩みを覚えた。
「父の生存はもう諦めています。でも、それでも私は父を誘ったこの大洞窟に何があるのか単純に知りたいのです。そしてそれが出来るのは先生以外にはいらっしゃらない」
男は自身を襲う確かな武者震いを感じ取った。
行方不明となったある地質学者の捜索という途方も無い目的もそうだが、それ以上に自身が長年追い続けた伝説のピラミッドの情報がこうした形で舞い込んできたことへの歓喜の震えだった。
あるいは今度こそ、自身の忌まわしい体質と決別できるかもしれない。
そう思うと、なおのこと震えを押し止めることはできなかった。

「先生はケイビングの権威でもあると聞き及んでいます」
「いや、ケイビングはしないよ」
男は自分を抑えるように、その地図をゆっくりと折りたたんでいった。
「俺のような人間がやるのは、もっと無謀な洞窟探険でね」

そうして男は地図を懐へとしまいこんだ。
「スペランキングと言うんだ。このスペリングは？」
「知ってますわ」
リーバーマンが笑うのと共に、男もこの日になって初めて笑った。

そうした時、未だに小さく震える男の足が外の広場に降りていく為の石階段を捉えた。

視界のリーバーマンごと世界が緩やかに回転するのを見て取り、男は自身の足が中空を踏んでいるのに気づいた。
女学生が先生と叫んだ。
男はごく短い階段で転げ落ちる最中、その一段ごとに、自身の虚弱体質と伝説のピラミッドの存在を交互に夢想した。
「ぐおおおおお」

こうして男は死んだ。

To be continued...

第五回　炎の追跡

男は次は三度、ヘッドランプをつけた。
「よし、ここでいい。横穴が見える」
上方の操作者は暗闇の明滅を見て取り、ゴンドラを停止させた。
「随分と深いじゃないの。それに隣のイタリア人が作ったピザ焼き窯よりもイカしてやがる」
男は手元のブラスターがしっかりと充電されているのを確認し、横穴への一歩を踏み出そうとする。あまりに偉大な冒険の訪れに、自然と足が震えてくる。
「やってやるかな」

跳躍。
ヘッドランプが揺れ、その視界が不安定になるも、男はしっかと洞窟の横穴へと辿り着いた。
「おうおう、よく見りゃゴンドラから地面まで随分と離れてやがる。ちゃんと跳ばなけりゃゴンドラから真っ逆さまだ」
男は周囲を確認しつつ歩き始める。

ふと静まり、微かに人工物、それも重機めいた低音が耳に届いた。
男のヘッドランプが未踏の洞窟には不似合いな、粗末なエレベーターの姿を照らし出した。
「ああ、わかった。ご先輩さん方が居た訳だ」
男は足元を良く調べ、簡単な跳躍でエレベーターへと飛び乗れることを目算した。
次いで、数珠繋ぎで観覧車みたく回っているリフトが、ちょうど良い高さの所に来るのを待つ。
「やってやるかな」

再びの跳躍。
男の目算通り、１秒もしないうちに数段目のリフトは男の右脚の石膏と衝突し、その着地を丁寧に迎えた。
「まだ十分に動いてるみたいじゃないか。先輩方の苦労も報われた訳だ」
リフトが１０メートル程降下した所で軽く跳び、反対側にある昇りのリフトに足を取られないよう男は着地する。
「さて、この先にゃ何があるっていうんだい」
誰に聞かれることもない呟きの後しばらく歩いていると、前方にそれが現れた。
「いいね。半信半疑だったが、先輩方のご執心ぶりを見る限り、ちょっとは信用の方が勝るね」
男の視線の先に、洞窟の上部から垂れ下がる登攀用ロープがあった。
詳しく見れば、行き止まりに見える空間の上部に横穴が続いており、ロープはそこに至る為の足掛けとして用意されているようだった。
「どれ、子供心に帰ってみようかな」
男は跳躍してロープに掴まり、全身を使って登っていく。
「人には見られたくないね、カブトムシになった気分だ」
ヘッドランプの光が、ようやく上方に続いた横穴を照らし、しっかりとした足場が続いていることを捉えた。ゴンドラやエレベーターでの経験を生かし、今度は安定した高度からの跳躍を試みる。
「やってやるかな」

この洞窟に入ってから何度目かの跳躍を終え、男は足下が安定していることを確かめ、再び歩き出した。

「おっと」
ヘッドランプの先ばかり注視して歩いていた男は、足元に転がっていた小石に思わず足を取られた。
「気をつけないとな、どうにもさっきから嫌な予感ばかりするぜ。まるでもう何度も死んでから帰って来たような気分だ」
男は、その先にも転がっていた小石をひょいと避ける。
「それに、今となってはこの洞窟も我が家みたいなものだしな」
一人呟いてから、男は前方をヘッドランプで照らす。
「それ、何が置いてあるかわからない所も我が家そっくりだ」
男の前方、横穴の行き止まりには積まれた資材が無造作に転がっていた。
おそらくは先行者が残していったものだろう。洞窟内で使用する為の照明弾やダイナマイトが今もその役目が来るのを待っている。
「とりあえずはここで行き止まりみたいだな。どうやらここまでが作業用の搬入路だったのかもな」
何かに使えるかもと思い、男は照明弾一つとダイナマイトを二つほど懐にしのばせて、男は元来た道を帰っていく。

再びロープを降り、エレベーターで昇っていくという単純作業は、予想外に時間を食った。というのも、いざその段になると男の脳裏に不吉な幻影ばかりが浮かび、必要な跳躍すらためらわせるのだ。
しかしあるいは、その慎重さがあったからこそ、無傷でゴンドラまで辿り着けたのかもしれない。
「今なら金曜の午後くらい冴えてるね。いよいよ俺もプロの感ってヤツに目覚めたのかな」
二度ほどヘッドランプを照らし、上方への合図を再開しつつ男が呟いた。
さらに数メートル降下し、もう一つの横穴が見えた所で三度の合

図が送られゴンドラが停止した。
「よっと、慣れたもんだね」
危なげない跳躍を見せ、男は小さな横穴へと滑り込む。そこまで来て、男は波打った地面に足が沈み込むのを感じ取った。
「あーあ、意外と良い靴だったんだぜ。これじゃパーティには履いていけないな」
横穴内部、湧水と交じり合って泥状になった所を苦心しながら進み、やっと地面が固くなったのを確認してから、足を振って靴にこびりついた泥をその場に撒き散らす。
一方、頼りのヘッドライトは既に前方の大穴を照らしている。
「またジャンプかい。いよいよ足の方も悲鳴をあげてるぜ」
言葉とは裏腹に、冒険家としての経験がそうさせるのか、男は助走をつけた跳躍で危なげなく大穴を飛び越す。

大穴から少し進んだ前方で岩壁が、さしづめ巨人の昼寝のようにそびえ立っているのに気づいた。そしてまた、その優雅さに欠ける昼寝姿に見えた理由として、その上方の空洞から空気の流れが吐息のように漏れているのを理解した。
「今度は行き止まりじゃなく、この先に道が続いてるみたいだな」
そう言ったものの、周囲を見ても登攀可能なロープも無ければ、掴みかかれるような取っ掛かりも無い。可能性としては、触れてわかったその岩肌の脆さから、これがダイナマイト一つでも十分に爆砕できるということだ。
「なるほど、おあつらえじゃないか。神様に感謝を」
男は先頃拾って懐にいれていたダイナマイトを取り出すと、それが最も効果的に爆破できるだろう、岩壁のくぼみに設置した。
次いで、地上に出たら煙草を吸おうと思って持っていたマッチを擦り、その長めの導火線に火をつけた。
「さあ、安全な距離まで逃げるかな」
男の計算は合っていた。

十数メートルも離れれば、十分にその衝撃から逃げることはできる。

しかしそれは、男の足を止めた。
大穴があった。
先程の大穴をわざわざ飛び越えてまで爆破地点から距離を取るべきかどうか、ほんの数秒間悩んでしまった。
「どこか隠れられる所……」
そう男が振り返った所で、強烈な光が襲った。

逃げられる距離だった。
洞窟という構造が、衝撃を銃砲のように一点に集約して放つものだということだけが、誤算だった。

音より先に衝撃が男の体を包んだ。
上がる炎も爆音も、まだ届かない。

「ぐおおおお」

こうして男は死んだ。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

第六回　決死の毒ガス帯

男が居る。焼け焦げた髪の毛を撫で付けて、無理矢理にドレスコードに見合わせる。
続いてヘッドランプ付のヘルメット、もちろんここでの正装だ、それをしっかりと装着しておく。

男は次は三度、ヘッドランプをつけた。
「よし、ここでいい。横穴が見える」
この横穴は未だ通っていない物だが、男は既にいくらか安堵の境地にあった。
というのも、先頃、より上方の横穴を通った時に、この洞窟の導入部というのは既に人間の手が入っていることを確認している。人造のリフト、吊り下げられた登攀用のロープ、発破用のダイナマイトに少しばかりの財宝。
安全とはいえないまでも、人間が行き来するだけのスペースがあることは確かなのだ。
「よっと、慣れたもんだね」
危なげない跳躍を見せ、男は小さな横穴へと滑り込む。

横穴を少し進み、ぬかるみと大穴を軽々と越えた男は前方で岩壁が巨人の昼寝のようにそびえ立っているのに気づいた。
「今度は行き止まりじゃなく、この先に道が続いてるみたいだな」
そう言ったものの、周囲を見ても登攀可能なロープも無ければ、掴みかかれるような取っ掛かりも無い。可能性としては、触れてわかったその岩肌の脆さから、これがダイナマイト一つでも十分に爆砕できるということだ。
「なるほど、おあつらえじゃないか。神様に感謝を」

男は先頃拾って懐にいれていたダイナマイトを取り出すと、それが最も効果的に爆破できるだろう、岩壁のくぼみに設置した。
次いで、地上に出たら煙草を吸おうと思って持っていたマッチを擦り、その長めの導火線に火をつけた。
「さあ、安全な距離まで逃げるかな」
男の計算は合っていた。
十数メートルも離れれば、十分にその衝撃から逃げることはできる。迷うことも無く、先程跳んできた大穴の近くにある岩陰に身を隠し、爆発の衝撃に備える。

やがてカノン砲のように洞窟全体を震わす爆音が響き、湿った圧力が男の横をすり抜ける。
「おお、凄い威力。思わずブルっちまうね」
男は少し戻り、明らかに行われた破壊行為の跡を確かめた。
もし正規のケイビングを行う者なら、邪魔な岩を爆破するなど到底思いつかないことだろうが、この男が行ってきたのはなお危険、かつ無謀な行為、時には見下されてしかるべき冒険なのだから、こうした事柄はお手の物という訳だ。
「生きてて良かったね。死んだらあの世でノーベルに集団訴訟起こしている所だ」
爆ぜ飛んだ小石を蹴りながら、男は熱気の残る空洞を先に進んでいく。

「思った通り、結構先に続いてるみたいだな」
先程までの平坦な道から変わり、いくらか凹凸の増えた道を男が進んでいく。
「そういや、エネルギーの方はどうなってんだったかな」

男はここで、地上から潜る際に背に着けてきた装置のことを思いやる。
ケイビングに及んで、場合によってはガスが充満している場所や水中を進む可能性がある。男は準備の際、そうした危機を切り抜ける為に小型の酸素供給装置を用意してきていた。ただし重装備となることを避ける為、装置の動力となるバッテリーは手元のブラスターと一体化されており、この洞窟探査の間に最低でも数回の交換が必要となる予定だった。
「随分と手間どっちまったからな、もう半分程度か」
男は万が一のことを考え、余裕のあるうちにバッテリーの面倒な交換作業を終えておくことにした。
「尽きる前に補充するのは愛情と同じじゃないか。それに、この面倒臭さもそっくりだ！　ほらよし！」
適当にポケットに詰め込んでいたバッテリーと交換し終えた男は、その現代のプレートアーマーを着込み直し、再びの再征服行に乗り出していく。

また少し歩いた所で、ふと眼前の異常に気づく。
微かな異臭と熱気を肌で感じ取った一方、ヘッドライトの光は暗闇に浮かぶ蒸気の幕にさえぎられた。
「おっと」と声を上げた先は、二度と口を開くことは無かった。
直後、眼前の岩から高圧の熱水が噴き出した。
強烈な硫黄臭に脳髄を打たれ、思わずその場でしゃがみ込む。だがそれと共に、プロとしての自分が毒ガス帯に入り込んだ時にどうすべきか、何より冷静に判断することができた。

軽口を言うこともなく、粛々と背にある命の綱をたぐりよせる。
小型のボンベからは生のそれでない、鉱物じみた酸素が供給され、男を毒ガスから守る。
男を毒ガスから守る。

男を毒ガスから、守るはず。

はずだった。

何度トリガーを引いても、空しい機械音が響くだけで男に空気が届くことはない。

「バッテリー切れてんじゃねぇかよ！！」

思わずの絶叫。

それと共に高圧の毒ガスが肺一杯に広がり、なんとも言えない爽快さ、突き抜ける程の清冽さを与える。

「ぐおおおお」

こうして男は死んだ。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

第七回　揺らめく悪霊

男が居る。
心なしか痩せこけた感じを受けるのは、いまいち生気の宿らない瞳のせいもあるだろう。

男は次は三度、ヘッドランプをつけた。
「よし、ここでいい。横穴が見える」
この横穴は未だ通っていない物だが、男は既にいくらか安堵の境地にあった。
というのも、先頃、より上方の横穴を通った時に、この洞窟の導入部というのは既に人間の手が入っていることを確認している。人造のリフト、吊り下げられた登攀用のロープ、発破用のダイナマイトに少しばかりの財宝。
安全とはいえないまでも、人間が行き来するだけのスペースがあることは確かなのだ。
「よっと、慣れたもんだね」
危なげない跳躍を見せ、男は小さな横穴へと滑り込む。

道中にはいくらか障害もあった。しかし男はそのいずれも悠々と避けていく。
足を取る泥濘を削ぎ、大穴は軽々と跳躍し、行く手を塞ぐ大岩は拾ったダイナマイトで破砕する。
こんなに満たされた気分は久しぶりだ。この洞窟が困難と危機とを呼吸をしているのだ。この先いくらでも窒息してしまいそうになるほどに。
窒息、という語をイメージした時、不吉な影が脳裏をよぎった。
「そういや、エネルギーの方はどうなってんだったかな」

男はここで、地上から潜る際に背に着けてきた装置のことを思いやる。
これはケイビング時にガスが発生している地帯や水中を進む際に必要となる、酸素供給装置である。この装置は、男が洞窟探査にあたってある団体から特別に貸与されたもので、通常の物よりも小型軽量化が図られており、特注のブラスターと一体化したその外見はＳＦ小説に出てくるそれに似ている。
「随分と高価な機械らしいしな。俺の命よりこの機械の保険金の方が幾分か高いだろうさ」
男は万が一のことを考え、余裕のあるうちに装置のバッテリーの面倒な交換作業を終えておくことにした。
「尽きる前に補充するのは愛情と同じじゃないか。それに、この面倒臭さもそっくりだ！　ほらよし！」

バッテリーを交換し終えた男は、また少し歩いた所で、ふと眼前の異常に気づく。
微かな異臭と熱気を肌で感じ取った一方、ヘッドライトの光は暗闇に浮かぶ蒸気の幕にさえぎられた。
「おっと」と声を上げた先は、二度と口を開くことは無かった。
直後、眼前の岩から高圧の熱水が噴き出した。
強烈な硫黄臭に脳髄を打たれ、思わずその場でしゃがみ込む。だがそれと共に、プロとしての自分が毒ガス帯に入り込んだ時にどうすべきか、何より冷静に判断することができた。
軽口を言うこともなく、粛々と背にある命の綱をたぐりよせる。小型のボンベからは生のそれでない、鉱物じみた酸素が供給され、男を毒ガスから守る。

なに、予想の範囲内さ。
洞窟を進むってことは、こういう危険をかい潜っていくことだ。洞窟の毒ガスなんてものは、戦場の銃弾、取引市場の数字、家庭なら女房の叱責とちょうどおんなじだ。
そう男は考えた。

肌を焼く熱気が薄れたあたりで、男は手元に手繰り寄せた計器が基準の酸素濃度を示しているのを見て、自身の命をつなぎ止めた大仰な機械を手放した。
「嫌になっちゃうね、こんな洞窟で二分も喋らないと頭がどうかしちまう」
軽く一息ついた所で、男は計器のある一点が異常な反応を見せていることに気づく。
硫化水素の発生は無く、酸素、二酸化炭素ともに濃度は正常。心理的な窒息感以外はどこをとっても地上と同様である。しかし一点、洞窟内ではおおよそ使い道など無く、男も冗談で付属しているのだろうと思っていた大気イオンを測定する項が、それこそ冗談のように乱高下しているのだ。
「壊れちまったか？　おいおい、よしてくれよ、クソ高い保険金なんざ払いたくないね」
とはいえ、いくら不安に思おうとも装置の狂騒ぶりは変わることなく、在り得ざる数値が在り得ざる存在を証明しようとしている。

そうして男は背後に明らかな人の気配を察知し振り返る。
「おいおい、嘘だろ」
先程まで自身が居た毒ガス帯の中に、黒々としたカーテンの向こうに確かな人影が存在し、それが揺らめいて近づいてくるのがヘッ

ドランプに照らし出された。
人間ではない。人間であれば、毒ガスの中をなんの光源も持たずに歩くことなどできはしない。
では何か。
では、それが何かを考えることを、男は放棄した。
「知ってるさ、ああ、アンタのことだって知ってるさ」
男は人影の方に向き直ることなく、一気に洞窟の奥へと駆け出す。
未踏の大洞窟、そして伝説のピラミッド。何も今まで誰一人として挑まなかった訳ではない。
しかし未踏であるというのは、帰還した者が一人もいないからこそ呼ばれる称号だ。今まで幾人もの無謀な冒険者が栄誉と名声、いくらかの探究心を満たそうとして薄暗い洞穴へと入り込み、その中で力尽き、食物連鎖の下位に取り込まれていったはずだ。
だからこそ、いつしか洞窟探険者の間では噂されてきたはずだ。この大洞窟にある伝説のピラミッドが、その眠りをさまたげようとする探険者を呪い殺すのだと。そしてここで死した者の魂もまた、新たな探険者を呪う悪霊へと変わっていくのだと。

男はなおも駆けている。ヘッドランプで切り取られた視界が上下左右に揺れる。
「くそったれ、お前らは聖書も読んでないのか！　こんな所でぶらついてると神様の目に届かないからな！」
自身も決して敬虔なキリスト教徒でないが、少なくともこんな所で悪霊になっている魂よりは救済されるべきだ。そう思えばこそ、背後に確かに存在する異様な空気が恨めしく思えた。
と、ここで男は、あるいはそれがガスの影響で見せた幻なのではないかと思い、ふと立ち止まりと背後を振り返った。
「ああ、やっぱり見なけりゃよかった」
幻などではなかった。
光の向こうで、黒いもやが不気味に笑っているように形を作って

追ってきている。
「安心しろよ、俺はお前らみたいなのを信じるとも。チベットの寺院にだって、中南米の遺跡にだってお前らみたいのはいるんだからな」
男は手に先頃拾った照明弾を握りこんでいた。
「だから迷わず天国に行ってくれよ！」
男は照明弾を起爆させ、洞窟いっぱいに強烈な光源を作り出した。こうして悪霊を暗い所から無理矢理に引きずり出せば、こちらの勝利だと男は確信した。

確信した、だけだった。

洞窟全体が白黒写真のように鮮明になる最中、黒いもやは、悪霊だけは無声映画時代の俳優のように突き進んできた。

「効かねぇのかよ！」

男が叫び、振り返って逃げる為に駆け出した。
その瞬間、男は勢い余って前方に空いていた大穴へと、その身を投げ込んでいた。

「ぐおおおおお」

こうして男は死んだ。

To be continued...

第八回　外伝？

一台の日本製小型ジープが、村落への輸送だけに使われる未舗装の荒れ道を疾走する。
開け放たれた窓から、熱い空気と周囲に乱雑に生える原生林の湿った臭いが入り込んでいる。
南米人らしい恰幅の良さと黒々とした口ひげを備えた運転手は、こうした空気にいささか似つかわしくない風貌、しかしあるいはその眼光だけが良く馴染んだ、中年の白人男性に声をかけた。
「乗り心地はどうだい旦那」
「最高だね。ケツが程よくシェイプアップされそうだ」
「そうでしょう！　日本車は最高だ！」
男は運転手が自分の答えになど大して興味がなく、ただ手に入れたばかりであろう中古の日本車を自慢したいだけだと知って、落胆にも同情にも似た感情を抱いた。
「ところで旦那！　腕はどうしたんで？」
「なに、美女に見とれて階段から転げ落ちただけだよ」

可憐かつ野心深げな女学生アリス・リーバーマンより渡された古地図。
それは自身の夢であり目標である、伝説のピラミッドが眠ると言われる大洞窟へのスペランキングへの導きだ。
興味のない学生達への詰まらない講義を取り止めて、自身の欲求の為に行動を起こしたことは、もちろん自分にとって、そして学生達にとっても、幸運な結果になったと思われる。
男はリーバーマンの紹介を得たことで、彼女の父が探査の際に拠点としていた近隣の街では厚遇を受けた。
宿に残されていたリーバーマン博士の装備もいくらか借り受けられ

たし、洞窟までの案内役を買ってくれる人物にも事欠かなかった。特にこの気の良いマリオは初日から荷物を運んでくれるなど何かと良くしてくれたので、男は彼に案内を頼むことにした。
「旦那はあの“リーベルマン”先生のご友人か何かで？」
道が道でなくなりかけた頃、終始話し続けるマリオが新たな話題を振ってきた。
「ああ、同じ大学に勤めているんだ。彼から連絡があってね、研究の応援に来た訳さ」
「へぇ！　いやあ、大学の先生ってのは凄いもんですね！　俺の息子も首都の大学に通ってるんだがバカなまんまでしてね。先生みたいな人に教われば多少は直るとも思いますがね」
つくづく人の自尊心をくすぐるのが上手い人物だと男は思った。こうした積み重ねが、何も無い地方の街での臨時収入を得る土台にもなるのだろう。
もしかしたら、この車もリーバーマン博士の案内でもして、それで得た収入で買ったのかもしれないと思ったが、改めてそれ聞くほどの元気はもう男に残っていなかった。
「それにしたって、この道はどうにかならないのか？　いい加減、腰を落ち着けたいんだがな」
「そう言われましてもねぇ。旦那の目的地に行くにゃあここを通るほかないんでさぁ」
多少くすんでいるバックミラー越しにマリオが視線を送る。
今までは軽口に答える時には振り返っていたものが、この道に入ってからは一向に前を向いたままであるので、あるいはこの道が、ベテランであるマリオにとっても集中力を要する程なのかと思い、男はそれ以上は何も言わなかった。

「しかし旦那、気をつけてくださいよ」
バックミラーに映るマリオの目が弱々しくしばたいた。

「大丈夫さ、こっちも洞窟探査に関してはプロなんだ」
「いえ、違いますよ旦那。洞窟もそうだが、俺ら地元の人間が本当に恐れてるのは奥にあるモノなんでさ」
「伝説のピラミッドか？」
「Ｓｉ、旦那達みたいな人は貴重な遺跡だと言うが、俺らからしちゃあそこは悪霊の眠る場所だ。近づいただけで高熱を出したっつうヤツを、俺もこの眼で何人も見てきたんだ」
「安心しろ、俺が調べるのはあくまで洞窟だよ」
　それならいいんだが、と続けてマリオはそれきり黙ってしまった。
　嘘をつくつもりも無かったが、気の良いマリオに余計な心配をかけさせたくなかったので、男は自身の真の目的がその悪霊の眠る場所だとは言わなかった。
　男はしかしなるほどとも思った。そうした謂れがある洞窟であればこそ、自身が求めるのに足る危険と財宝、それは等価だ、が隠されているに違いないだろう。

　ジープが赤土を跳ね上げて周囲の青々した草に撒いていく中、男は自分達の後方から激しい駆動音が響いているのに気づいた。
「おいマリオ、ちょいと聞くが、この辺の道はここ一つなのか？」
「いいえ旦那、左手の崖の下に旧道がありますよ。まぁ、崩れやすいんで普段は誰も使わないが」
　そこまで聞いた所で、後方の駆動音がより激しく響き、思わず振り返った男は、無骨な黒のジープが砂埃を巻き上げて追走してくるのを目撃した。
「マリオ！　後ろから車が来てるぞ、誰か知り合いでも呼んだのか？」
「え、あ！　本当だ！　旦那、こいつはいけない！」
　マリオが男への確認も無くアクセルを踏み込んだ為、男は張り替えられたばかりであろうシートに何度か尻を打ちつけた。

「おい！　おいマリオ！　あの車はなんだ！」
「ありゃ“エル・ワケロ（盗掘団）”でさ！　きっとまたその辺の遺跡でも掘り返そうってんだろうが、嫌なのに見つかっちまった！」
「ああ、なるほど、ヤツら俺達の持ってる物も売りさばこうって腹かい」
マリオはなおもアクセルを踏み込むも、背後から迫るジープの馬力の方が勝るらしく、その距離は次第に詰まっていく。
「旦那！　もし捕まっても大人しくしていてくださいよ、ヤツらは後先を考えないんだ！　中にはマフィアから銃を買ってるヤツもいる」
言葉の途中にも、既に背後のジープは接触するかしないかの距離にまで詰めてきていた。
「忠告感謝するよマリオ、だが俺は俺で捕まる訳にもいかないんだ」
実際、男はそれほど金目の物など持っていない。せいぜいが別れた妻から叩き返された指輪くらいだ。
こんな物はいくら失っても構わないが、相手は売れる物なら先祖の生活雑貨だって売るワケロの連中だ、おそらくは大洞窟の場所が記された古地図やケイビングに必要な機材も根こそぎ奪い去っていくだろう。
そうなれば今回の洞窟探査計画は完全に頓挫する一方、ワケロが手にした古地図などはマーケットへと流れていく。
盗掘品を購入するような者の中には、男自身もそうであるから解るが、進んで危険な遺跡を荒らそうとする者も居る。
そうした者に装備一式と宝の地図が渡れば、それはそこで別のアドベンチャーが始まることを意味する。

そんなのは御免だった。
未踏の大洞窟の制覇は自身だけの業績であり、伝説のピラミッドや莫大な財宝の発見も自分だけものにしたかった。
もしくは、リーバーマンから託された期待もまた満たしたかった。

自身の強欲さには笑いしか出てこないが、それが自身のような人間の因果だと思うと、男は自然とそれを受け入れて外敵と対抗する道を選んでいた。
「マリオ！　アクセルを踏み込むんだ！」
「え、旦那！　ここじゃこれ以上は危険だ！　崖下に落ちてちまう！」
「ちょうどいい旧道があるだろう、そこに跳んで後ろのヤツらを撒くんだ」
依然、黒いジープは猛烈に追走してくる。
あやうく接触するかという所で、マリオからハンドルとアクセルの制御を奪い取った男により一気に車は加速した。
「旦那、御免ですよ！　せっかく買ったばっかりなんだ！」
「壊れたら今度は新車をプレゼントするよ！」
ワケロ達が運転するジープの野蛮な追撃をかわし、日本車は安全性という面目を失う運転を続けた。
「ここだ！　一気に降りるぞ！」
「おお！　神よ！」
男は身を乗り出してマリオの胸元のハンドルを思い切り左へと切った。
それと同時に黒のジープは強烈な一撃を加えようと突進したが、既に車体は大きく道を外れ、木をなぎ倒しながら緩やかな崖を降っていった。

開いた窓から折れた木々の枝が入り込んでくる。
「だ、旦那！」
必死にハンドルを操作する男は、眼前に赤土の古びた旧道が広がっているのを確認した。
「う、うわぁあ！」
安定した着地を目指したが、不運にも車体は転がり、一回転した

所でマリオは開ききった扉から外へと投げ出された。
「マリオ！　くそ！」
男は叫び、どこかにぶつけて車体を安定させようと、回転する視界の中で周囲を探した。
男が見ると、マリオがちょうど特に草木が生い茂った箇所に転がり込んでおり、とりあえずは無事であることが解った。
「旦那！」
草の中から上体を起こしたマリオは、自慢の日本車が旧道を激しく回転しながら進んでいくのを目撃した。
合計で四回転ほどした所でようやく車は逆さのままで止まり、それでもマリオはいくらか安心した。

と、同時に。

車を乗せた旧道の一部が崩落を始めた。

「だ、旦那！」

そして赤土の山と共に車は、さらなる崖下へと落ちていった。
マリオが呆然としたまま見ていると、崖下から爆音と炎が上がった。

「だ、旦那ぁあああ！！」

こうして男は死んだ。

To be continued...

第九回　天国への梯子

男が居る。
ゴンドラに揺られつつ、手にした世界で最も売れている出版物の文言をヘッドランプで照らす。
「ほらみろ、マルコ福音書第５章の１３節にもある。悪霊は豚になって湖に落ちるべきなのさ」
言い終え、男は古びた聖書を懐にしまい込み、普段の不信心な行いを悔い改めた。

未踏の大洞窟、そして伝説のピラミッド。それらが指し示すのは無類の冒険と尽くし難い野心だが、その二者を裏返した所にそれは在る。つまり、無謀な冒険によって命を落とした者達と、彼らをさまよわせ続ける未練が、だ。
地下遺跡に残る悪霊なんていうのは、洗いざらしたシャツのシミ程度には存在しているものさ。出会った時には最高に不運だが、しっかりと準備を行えば顔を付き合わせる必要も無くなる。この洞窟に入る時に男はそう考え、手元のブラスターの充電を怠らなかった。
背中の装備と一体化されたＳＦのギミックじみた機械、イオンを分解させる効果を持ったこれを開発者はファントムブラスターと呼んだそうだ。なにも最初から悪霊退治という役目があった訳ではないだろうが、その効果を知った時に男は、それが聖書の主人公に比肩する役割を担うと確信した。

男はなおも駆けている。ヘッドランプで切り取られた視界が上下左右に揺れる。とはいえ、男の行動は必ずしも意味を欠いた疾走でなく、明確な退路への逃避であった。

「アンタはいいよな、いくら走っても疲れないんだ！　次回のオリンピックに参加したらどうだい？」
走りざまの軽口に対する返答はなく、時折、物理的でない冷たさが男の頬を何度も撫でた。確実に背後に迫る悪霊から一直線で逃げるには、あまりにこの洞窟は危険すぎる。

男が持つ計器が異常な数値を示し始めたのは、ゴンドラを降りて、いくらかの困難を越えた頃だった。高価な機械がなんらかの原因で故障したと思うことは、その数値の真実よりも、なお現実的な不安を増大させるものがあった。
しかしやがて、その数値の意味する所が形を持って、つまり歪んだ影、あるいは亡霊として、現れたのだ。
男はその正体を信じた時、迷わずに駆け出していたのだった。

ここで男の目に、前方で大きく広がる大穴の不気味な姿が飛び込んできた。穴には天井から、おそらく先行者が取り付けたであろう、一本のロープが吊り下がっている。
世間にはこれを窮地と取る者とチャンスと取る者の二者がいるが、今、この洞窟を疾走する者に前者はいない。必定、男も無二のチャンスを無駄にする訳もなく、地上ならば何よりの勇気が必要なこの場面で、振り返りもせず助走もつけず、一足飛びでロープへと掴みかかった。
「ハッハ！　俺のより良いロープ使ってるじゃないか！」
跳躍の反動はロープのしなりが受け持ち、投げ出されそうになる身体を即座にロープで巻きつけ、男は小さく回転しながらロープで大穴を降下していった。
男の背後に迫っていたであろう悪霊は、高速降下によってその距離を引き離され、もはやヘッドランプの明かりが照らすのは巨大な

動物の食道のように広がる大穴の姿だけだった。
「おうおう、悪霊でも落ちるのは怖いのかね」
ロープの終わり際、ちょうど良い高さで地面が見えたので男はそのまま着地する。
「なるほどチクショウ、前言は撤回させて貰うよ」
上方を向いたヘッドランプの光が、大穴の横壁を黒いもやがすり抜けて広がっていくのを照らし出した。

男はそれ以上は何も言わず、手元のブラスターを悪霊に向けて構えた。いざ実際にこれが悪霊なんていう非科学的なものに効くのか、はなはだ疑問だが、今はこれしか頼るものがない。
懐の聖書は死んでからの方が役立つだろうさ。
そう考えて、男はブラスターのトリガーを引いた。
目前の空気が散乱していくような発破音が洞窟内で反響し、明らかに周囲の空気が、深く湿ったものから明るく乾いたものに変わっていくのを男は感じ取った。
依然、ブラスターは澱んだ空気を散らすようにうなっているが、黒いもやはなおも男の方に向かって直進を続ける。
「安心しろよ、天国への梯子はちゃんと支えておいてやるさ」
ブラスターが一定量の駆動を終えたのか、何事も無かったかのように沈黙したのと、目の前に迫った黒いもやが憎しみに満ちた人間の顔を浮かべてから霧散したのは、ほぼ同時だった。
「ただ悪いね、お祈りの言葉は忘れちまったんでね。自分で好きなの探してくれ」
男はそう言って、懐にしまっていた聖書を地面に丁寧に置いた。

「さて、ここから先に行けそうだな」
悪霊との戦いを終えた男は、自分が今居る所から少し離れた岩壁に梯子がかかっていることを発見した。

小さな跳躍が必要だが、悪霊から逃げた時の大跳躍を思えば取るに足らないものだ。
「よっと」
男は跳躍し、その右手が梯子の一段を捕まえた。

のは気のせいだった。

空気を握りこんだ右手は、すぐ下の一段を殴りつけ、その痛みが危機回避行動を忘れさせた。
男の右手は空しく握りこまれたまま梯子を掴むことを忘れ、ただ男の身体は洞窟の暗い穴に落下するだけだった。

「ぐおおおおお」

こうして男は死んだ。

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ．．．

第十回　青銅の鍵の謎

「おいおい！　ずいぶんとご執心じゃないの！」
深い地下洞窟を男が疾走する。
ヘッドランプは揺れ、安全靴が凶器のようなさざれ石の上を滑っていく。湿った空気が巻かれて風になり、その風がまた長い年月をかけて穿たれた岩の穴を通り、石笛のような呻き声を洞窟全体で響かせていく。
男の背後を辿る気流に乗って、もう一つの異質な空気が流れ込んでくる。死の間際に吐いた最後の息のような、重々しく死臭じみた酸っぱさを含んだ空気が、男の背筋を撫ぜるような所に吹き溜まっていくのだ。
「ありがたい説教の時間はおしまいだぜ！」
男が一歩大きく踏み込んで、自分が用意したゴンドラへと跳躍する。それとほぼ同時に、男の背後で死の空気が苦悶の表情を浮かべた人間の顔を作った。
「ゴンドラを降ろせ！　ハリー！　ハリー！」
男がヘッドランプを手早く三回明滅させると、ゴンドラが下降を始める。
縦穴を釣瓶のようにゴンドラが落下していく中、悪霊の顔は未だに恨めしげに男の方を追っていく。
「また次の日曜日に会おうぜ、悪霊ちゃんよ」
そう言って男は、右脇からファントムブラスターを取り出した。

伝説のピラミッドを求めて、未踏の大洞窟へと足を踏み入れた男を待っていたのは、終わりの無い悪路と問い難き悪霊の存在だった。悪路の踏破は危険が伴うものの、最後は地面に到着できるが、悪霊との格闘はそうは行かない。何度繰り返そうが、未練がましい亡者

の影は男の背後へと付きまとっていくのだ。
この何度目かの格闘も同様、男が洞窟を探索していく中で起きた慣れ親しむべからざる風景の切り絵である。

男はひたすらに急な坂道を駆け下りていた。
「まさか充電が切れてるとはね。これだから俺は懐中電灯には粗悪な電池は使うなって言ってるんだ」
安全靴が毛羽立った岩の絨毯をこそぎ落としながら、男は前方に広がる大穴を一足飛びで跳び越えた。未だに背後から悪霊の影が迫ってくるのを、五感の外で感じ取っていた。
「しかし、この鍵はなんだってんだ」
男は悪霊から追われる最中、ずっと握り込んでいた青黒い鍵に目を落とした。
さっきまで通ってきた深い縦穴の奥底、脆い梯子の下にこれは在った。誰かが起き去ったように、そこに一つだけ、恋人を待つように置かれていた鍵だ。
この鍵を手にしたら、あの悪霊が追ってきやがった。そんなに大事なものなのだろうか。と、男が胸中で感想を漏らし、なお思考を続けていた。
緑青の吹いたそれは青銅製で、古代南アメリカ文明で普遍的に見られるコンドルをかたどった印章が上部に刻まれている。金属器が日常で使用されていなかったアメリカ古代文明では、こうした物はほぼ間違いなく、祭祀などに関わる重要な遺物だ。時と場合によっては、これだけで博物館にも収蔵されるだろうが、男の心中にはそれ以上の存在を想起していた。
これは鍵なんだ。それもただの鍵じゃあなく、伝説のピラミッド、その入場に必要なルームキーだ。面白くなってきたじゃあないか。この酸化したみすぼらしい青銅が、黄金窟のプライベートへ立ち入る権利をくれたんだ。

「なるほど、未練がましいね」
男は振り返って、悪霊の影に青銅の鍵をちらと振ってみせた。
「アンタ、俺と同じような探険者だったんだろう？　俺がうらやましいかい」
男は前方で駆動を続ける運搬用エレベーターを発見すると、それへと飛び乗った。下降するそれから、次いで反対側を動く上昇側へと飛び移り、何事も無いように背後を振り返る。
未だに悪霊の影は男へと向かって亡羊な視線と、恨みがましい思念を送り続けていた。その澱んだ空気は、男と同様の洞窟探険者の装備を形作っているように見えた。
「悪いね先輩、アンタを振った恋人の部屋の鍵は俺が貰っちまったんでな」
悪霊は上昇する機械へと、漂い漂い、男を取り殺さんと近づいていく。男は男で懐から悠然とバッテリーを取り出すと、悪霊との距離が詰まる中、ファントムブラスターの充電を行っている。
「祝福してくれよ。式は次の日曜までに済ませるから」
そうして男はファントムブラスターの引き金を引こうとした。

と、同時にエレベーターが天井付近を通る。元より運搬用、人間が乗ることは想定されていない。
突き出した岩が、無防備な男の後頭部を打った。
岩の位置エネルギーは有り余る勢いを以って男をエレベーターから弾いた。

「ぐおおおお」

こうして男は死んだ。

To be continued...

第十一回　棺は疾走す

今、男が生きていられるのは、乾いた人生の釜に一掬い残った幸運によるものだった。

「これも日頃の行いが良いからさ」

男の掴みかかった岩壁、そのすぐ右横の石礫が一つ剥がれ落ちた。

奥深い洞窟、運搬用のエレベータを越えた先に広がる、採掘が行われていたであろう空間。男がそこに辿り着いた時、足元の小さな石筍につまずいたせいで、不必要な跳躍を行う羽目になった。

二度目の跳躍で地面を蹴った時、無秩序な採掘作業で脆くなっていたのであろう、足元の岩肌がぽろぽろと崩れ落ち大穴を出現させた。

かろうじて湿った岩壁に手をかけた男は、自らが引力の犠牲者になることを回避し得た。とはいえ、それも幸運の間。あとほんの少し、膝の高さほどでも落下していれば、無数の尖った石筍に身を貫かれていたことだろう。

「石のファランクスだ。古代ギリシア人にでも食らわせてやってくれよ」

よっ、と一息かけてから男は身をよじり、大穴からの脱出に成功した。

「それにしても」

男は言葉を呑む。

随分とずさんではないか。崩落を引き起こすほどの過度の採掘など、ゴールドラッシュでも起きない限り、どうあっても考えられない。それもこんな南米の奥地にひっそりとある大洞窟に、これだけの資材を投入する価値が見出されるのだろうか。

あるいは。

伝説のピラミッドという夢物語と金鉱脈を天秤に載せて、前者が大きく傾く人間。そうした先達が、自身を措いてこの洞窟を訪れているというのだろうか。だとすれば、それは一体どのような存在なのだろうか。

自分以外の存在の知覚が、男の中でそれこそ砂金掬いのように思考をうねらせた。孤独な洞窟の中での他者の存在は、光明であり、かつ浚いがたい泥濘だ。

いや、と、男は思考を打ち切った。

「とりあえず、膝の高さでも落ちたら死ぬってことが解った方が大事だな」

一人、暗闇に冷笑を漏らした所で、男は前方の岩肌に安置されているそれに気づいた。

「なるほどな」

男は安置されているそれ、緑青の吹いた青銅製の鍵を手にした。

「ジャガーの意匠だ。これもあのコンドルの鍵と同じ種類の物みたいだな」

懐にある青銅の重みを二倍に増やし、男は道が行き止まりになっているのを確認してから引き返すこととした。

その時、やはりあの感覚が、それは沼底の水草が揺れているのに良く似ている、空気の澱みが背後で渦巻く感覚が、男の身体を包み込んだ。

「アンコールはかけてないんだけどな！」

男が走り出して身を屈めた瞬間、頚動脈があった位置を錆びた鎌のような空気が通り過ぎた。

「もうひとっ走りしようか、最近運動不足なもんでね！」

男は暗闇を駆け出した。

「おいおい！　ずいぶんとご執心じゃないの！」

深い地下洞窟を男が疾走する。
ヘッドランプは揺れ、安全靴が凶器のようなさざれ石の上を滑っていく。湿った空気が巻かれて風になり、その風がまた長い年月をかけて穿たれた岩の穴を通り、石笛のような呻き声を洞窟全体で響かせていく。
男の背後を辿る気流に乗って、もう一つの異質な空気が流れ込んでくる。死の間際に吐いた最後の息のような、重々しく死臭じみた酸っぱさを含んだ空気が、男の背筋を撫ぜるような所に吹き溜まっていくのだ。
「ありがたい説教の時間はおしまいだぜ！」
男が一歩大きく踏み込んで、自分が用意したゴンドラへと跳躍する。それとほぼ同時に、男の背後で死の空気が苦悶の表情を浮かべた人間の顔を作った。
「ゴンドラを降ろせ！　ハリー！　ハリー！」
男がヘッドランプを手早く三回明滅させると、ゴンドラが下降を始める。
縦穴を釣瓶のようにゴンドラが落下していく中、悪霊の顔は未だに恨めしげに男の方を追っていく。
「また次の日曜日に会おうぜ、悪霊ちゃんよ」

男はゴンドラから飛び降りると、未だに横穴の天井のさらに上から覗く、恨めしげな冒険者の影を振り切ろうと直走る。ちょうど前方の縦穴にロープが吊り下がっているのを確認し、この先にさらに逃げ出す為のルートが確保されていることを確信した。
なるようになれ、だ。何度も渡った危ない橋じゃあないか。いい加減、橋の通行料くらい負けて貰いたいものだ。
ロープを滑り降りる男に、一種の喜びが訪れる。それはスペランキングという行為が持つ魅力、まとわりついて離れない危機の薄絹を、何度でも自分の意志で引き裂けるという、絶対の魅力だ。

「そらみろ！　また聞こえるぞ、俺を好いてる死神が逃げ出す可愛い悲鳴だ！」
ロープの到着先には、採掘物の搬入に使われていたのであろう、手押しトロッコが一台、無謀な搭乗者を求めて鎮座していた。
トロッコの車輪と噛み合ったレール、その先にあるのは、圧倒的な逃避と蠱惑的な危機だ。最もそれは、男にとっては手段と目的の合一でもある。
そうして男がトロッコの前方に足をかけたのと、歪んだ影が背後に現れ出したのはほぼ同時でもあった。
男はトロッコを止めているストッパーを蹴り飛ばし、前方に重心を傾ける。次第にトロッコが動き出し、いずこかへと誘う一種の引力に導かれ、必死の加速度がかかっていく。
「あばよ、どうしても会いたくなったら駆けずり回って追ってきてくれよ」
トロッコの起動加速が最大を迎えた時、悪霊の手が、あるいは言い得るならその爪が、男の頬をひっかいた。しかし、それを最後に悪霊とトロッコは一瞬にして遠く離れ、埋めがたい生死の距離に分かたれた。

トロッコが疾走する。
うねったレールは時折、搭乗する男の身を振り、底無き洞窟へと放り出そうとする。
右に曲がる。
男の頬を鍾乳石という形をした死が触れる。
左に曲がる。
浮いた右車輪が男を死の淵に叩き落そうとする。
左。
震動によって剥落した石礫が男の後ろ髪を弾いていく。
右。左。右。

何度でも、男にそれは近づく。ここは死の概念が形で存在し、それは至近なのだ。
「最高だね！　こんな乗り心地は離婚調停直後のバス以来だ！」
大きくトロッコがうねった。浮いた左車輪、前方の鍾乳石、後方に落下する石礫。自らの身は投げ出されんとし、突き出た石が男の顔面に向かう。

「あのヘッドランプ、結構高かったんだぜ」
非常用の懐中電灯を手に、擦り切っただけで済んだ額を押さえつつ、男はトロッコを降りた先の探索を始めた。
「階段だな。人が利用する為に作られてるかは知らないが」
ヘッドランプより小さい光円が、前方の鉄製階段を切り取った。
「とりあえず降りてみるか」
案の定、その階段はステップを踏んで降りていくには高すぎた為、男は懐中電灯を口に咥えてから、腰かける形から段を降っていった。
しかし二段目に降りた時、不運にも着地の衝撃で咥えていた懐中電灯を落としてしまった。
「おっと、これ以上はごめんだぜ」
すぐさましゃがみ込んで、暴れる光柱の行方を探す。幸いに、一段ほど下の地面に光を灯した状態で落ちたらしく、道筋を照らし出すような形で転がっており、その光源を探すのは容易だった。
「ん……、あれは」
男は息を呑む。
懐中電灯が照らす光の先、それらは人工の光に高貴な人造の照り返しで答えた。
「どうやらそうだ、ゴールドラッシュってのは本当だったのかもし

れないな」
無数に転がった金貨が放つ鈍い光。そしてそこに埋め込まれるように。
「黄金の鍵だ！」
それは青銅で作られたそれまでの鍵とは違う。太陽神を象った、決して錆びない鍵。それは間違いなく、比喩ですらなく、エル・ドラドへの鍵なのだ。
男は光の道筋に足をつけようと、先程と同じように腰掛ける形から階段を飛び降りた。

が、つかない。
足が、つかない。

周囲の暗闇が男の視界を狭めていたのもそうだし、地面に落ちた懐中電灯が錯覚を引き起こしたのもそうだ。
釜の底にこびりついて取れない不幸の滓が、男の足を掬ったのだ。
着地を予想した高さよりも、膝の高さを足したほどの高度は、男の体にとっては骨折以上のダメージを与えるのに十分だったのだ。

「ぐおおおおお」

こうして男は死んだ。

To be continued...

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8424k/

ベンチャード・ケイヴ

2010年10月11日17時47分発行